

幼児に対する防災教育プログラムの実践

小林 真・五十嵐望美・竹田 誠・窪田広美

幼児に対する防災教育プログラムの実践

小林 真¹・五十嵐望美²・竹田 誠³・窪田広美³

Program of Disaster Prevention Education for Yong Children

KOBAYASHI Makoto, IGARASHI Nozomi, TAKEDA Makoto and KUBOTA Hiromi

要旨

本研究では、幼保連携型認定こども園の年長児を対象に、地震の際の避難を中心とした防災教育プログラムを実施した。幼児が災害の種類に応じて自分の身を守る姿勢を学ぶ内容や、避難の際の安全の確保の方法などを学ぶ内容などを、設定保育の時間を用いて3回にわたって実施した。行動観察と保育者への聞き取り調査の結果、災害の種類や内容に関する関心が高まり、避難訓練の際には安全を確保する姿勢や行動が習得されつつあることが示された。今後は、利用しやすい教材の開発や、低年齢の幼児にあったプログラムの開発が必要である。

キーワード：幼児 防災教育プログラム 保育内容(健康)

Keywords : ong children, Program of Disaster Prevention, educational content (health)

問題と目的

1. 幼児教育施設における安全管理

日本では近年、大規模な地震や豪雨による災害が多発している。こうした自然環境の下では、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園（以下、総称する場合には幼児教育施設と表記）においては、子どもの健康と安全を守るための取り組みが不可欠である。平成29(2017)年3月31日付で公示され、2018年4月より施行された幼稚園教育要領は、あくまでも教育課程を編成するための根拠法令であるため、施設の管理運営としての安全管理については特に記載されていない。しかし幼稚園は学校教育法第1条に定める学校であるため、学校保健安全法の規定に則って安全管理を行うことになっている。これに対して幼保連携型認定こども園と保育所は、家庭に代わって「保育」を行う施設であるため、同日に告示された幼保連携型認定こども園教育・保育要領と保育所保育指針には、施設の管理運営についても記載されている。さらにこれらの施設も学校保健安全法を準用することが定められている。学校保健安全法の該当箇所は次の通りである。

学校保健安全法（抜粋）

第26条 学校の設置者は、児童生徒等の安全の確保を図るため、その設置する学校において、事故、加害行為、災害等（以下この条及び第29条第3項において「事故等」という。）により児童生徒等に生ずる危険を防止し、及び事故等により児童生徒等に危険又は危害が生じた場合（同条第一項及び第二項において「危険等発生時」という。）において適切に対処することができるよう、当該学校の施設及び設備並びに管理運営体制の整備充実その他の必要な措置を講ずるよう努めるものとする。

第27条 学校においては、児童生徒等の安全の確保を図るため、当該学校の施設及び設備の安全点検、児童生徒等に対する通学を含めた学校生活その他の日常生活における安全に関する指導、職員の研修その他学校における安全に関する事項について計画を策定し、これを実施しなければならない。

第28条 校長は、当該学校の施設又は設備について、児童生徒等の安全の確保を図る上で支障となる事項があると認められた場合には、遅滞なく、その改善を図るために必要な措置を講じ、又は当該措置を講ずることができないときは、当該学校の設置者に対し、その旨を申し出るものとする。

第29条（危険等発生時対処要領の作成等）学校においては、児童生徒等の安全の確保を図るため、当該学校の実情に応じて、危険等発生時において当該学校の職員がとるべき措置の具体的内容及び手順を定めた対処要領（次項において「危険等発生時対処要領」という。）を作成するものとする。

2 校長は、危険等発生時対処要領の職員に対する周知、訓練の実施その他の危険等発生時において職員が適切に対処するために必要な措置を講ずるものとする。

3 学校においては、事故等により児童生徒等に危害が生じた場合において、当該児童生徒等及び当該事故等により心理的外傷その他の心身の健康に対する影響を受けた児童生徒等その他の関係者の心身の健康を回復させるため、これらの者に対して必要な支援を行うものとする。この場合においては、第10条の規定を準用する。

学校である幼稚園はこれらの条文に従い、災害等の危険を防止する様々な措置を講じる責務があり、児童生徒等（幼児を含む）に対する安全に関する指導を行い、安全に関する計画を策定し実施することが義務づけられている。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領と保育所保育指針における施設の管理運営の中で、安全管理に該当するのは「第3章 健康及び安全」である。両者は内容に共通性を持たせてあるので、ここでは幼保連携型認定こども園教育・保育要領を例に挙げて検討する。

¹ 富山大学人間発達科学部 ² 富山市立太田保育所

³ 富山 YMCA 福祉会・幼保連携型認定こども園ふなはしこども園

幼保連携型認定こども園教育・保育要領（抜粋）
第3章 健康及び安全

第4 災害への備え

1 施設・設備等の安全確保

- (1) 認定こども園法第27条において準用する学校保健安全法第29条の危険等発生時対処要領に基づき、災害等の発生に備えるとともに、防火設備、避難経路等の安全性が確保されるよう、定期的にこれらの安全点検を行うこと。
- (2) 備品、遊具等の配置、保管を適切に行い、日頃から、安全環境の整備に努めること。

2 災害発生時の対応体制及び避難への備え

- (1) 火災や地震などの災害の発生に備え、緊急時の対応の具体的内容及び手順、職員の役割分担、避難訓練計画等に関するマニュアルを作成すること。
- (2) 定期的に避難訓練を実施するなど、必要な対応を図ること。
- (3) 災害の発生時に、保護者等への連絡及び子どもの引渡しを円滑に行うため、日頃から保護者との密接な連携に努め、連絡体制や引渡し方法等について確認しておくこと。

3 地域の関係機関等との連携

- (1) 市町村の支援の下に、地域の関係機関との日常的な連携を図り、必要な協力が得られるよう努めること。
- (2) 避難訓練については、地域の関係機関や保護者との連携の下に行うなど工夫すること。

幼保連携型認定こども園と保育所は学校安全保健法に則って施設の管理運営を行うが、容量や指針においても災害発生に備えたマニュアルの作成、定期的な避難訓練の実施、保護者や地域との連携を行うことになっている。

内閣府(2012)の報告によると、特に2011年3月11日に発生した東北太平洋沖地震(以下、東日本大震災と表記)では、岩手県・宮城県・福島県の3県で死者は15,786人にのぼり、そのうち0～9歳の幼児・児童499名が犠牲となった(2012年3月11日時点での公表)。特に、石巻市立大川小学校では多くの児童が津波に巻き込まれ、74人が死亡または行方不明となった。この災害に関して小学校および石巻市の安全管理体制が問題になり、損害賠償を求める訴訟へと発展した。震災の約1年後に現地を調査した北林(2013)は、大川小学校の裏山は足場の悪い細い道があるだけで長時間そこにとどまることは困難であること、大川小学校がハザードマップ上の避難場所に指定されていたために、さらにそこから避難を行うという判断を下すのは難しかったと報告している。2018年4月の仙台高等裁判所の判決では、裏山への避難は困難であったこと、石巻市がハザードマップ上で指定した避難場所そのものが誤りであったことを認めた。しかし、大川小学校はさらに次の避難場所(第3次避難場所)に避難するという計画を策定する義務を負っていたと認定した(日経アーキテクチャ、2018年7月12日付)。このように、学校や幼児教育施設は自分の学校等を取り巻く地理的要因を考慮して、何重もの安全対策を事前に行う責任を有することが司法の場で認定されたといえる。

2. 教育内容としての安全・防災教育

幼児教育施設は、施設としての安全管理を行うだけでなく、そこに在籍する乳幼児が自分で安全行動を取れるように教育する責任も負っている。2018年4月から施

行された幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針(以下総称として要領等と表記する)では、保育内容の領域「健康」の中で、子供が自ら安全を確保することがうたわれている。領域「健康」の該当箇所は次の通りである。

幼稚園教育要領(抜粋)

第2章 ねらい及び内容

健康【健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。】

1 ねらい

- (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。

2 内容

- (8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。
- (9) 自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。
- (10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (5) 基本的な生活習慣の形成に当たっては、家庭での生活経験に配慮し、幼児の自立心を育て、幼児が他の幼児と関わりながら主体的な活動を展開する中で、生活に必要な習慣を身に付け、次第に見通しをもって行動できるようにすること。
- (6) 安全に関する指導に当たっては、情緒の安定を図り、遊びを通して安全についての構えを身に付け、危険な場所や事物などが分かり、安全についての理解を深めるようにすること。また、交通安全の習慣を身に付けるようにするとともに、避難訓練などを通して、災害などの緊急時に適切な行動がとれるようにすること。

保育内容の領域「健康」の主旨の中に、「自ら安全で健康な生活をつくり出す」ことが謳われている。これを踏まえたねらい(3)には、健康・安全な態度を身に付けることと、見通しを持って行動することが挙げられている。このねらいを達成するために、内容の(8)～(10)には幼児が体験すべき活動として、自ら健康・安全な習慣・態度を身に付けることが挙げられている。こうした習慣・態度を身に付けるための留意点として、家庭との連携、遊びを通じた安全についての理解、避難訓練等を通して災害などの緊急時に適切な行動が取れるようにすることが挙げられている。

幼児教育の本質は、主体的な遊びを通じた学びである。つまり領域「健康」のねらいを達成するためには、日常の遊びの中で健康・安全に気づき、みずから健康・安全を確保する行動が取れるようになることが大切なのである。幼児教育施設における防災教育は、領域「健康」の中に位置づけられる。したがって遊びを通して子どもたちが自ら体験し、考え、適切な行動を習得していくための環境をいかに作っていかけるかが課題なのである。

3. 防災教育の現状と課題

藤井・川原崎(2017)によると、「災害時要援護者」と呼ばれる乳幼児、障害者、留学生や外国籍の住民、高齢者の東日本大震災における被害は健康者の2倍以上であったという。こうした問題を解決するためには、学校・福祉施設・地域における防災教育の取り組みが欠かせ

ない。

桜井(2013)によると、防災教育とは人々が自ら災害に適切に対応し、被害を軽減することができるようになる(減災)ための知識を備え、災害時には自ら判断し、行動する能力を育てる教育である。そのねらいは、人々が状況に応じて得られる情報をもとに、命を守るための行動を遂行できるようにすることである。しかし高橋(2008)は、従来は高齢者が子や孫に災害の教訓を伝承していたが、核家族化と共に災害の伝承が途絶える傾向にあり、学校での防災教育を推進していく必要があると述べている。

しかし藤井・川原崎(2017)は、学校での防災教育が年に1~2回の単発的な避難訓練の実施にとどまっていること、そして避難訓練の内容は児童生徒にとって受動的・他律的であり、場合によっては非現実的な訓練になりがちであったと指摘している。また村越・村松(2014)も、学校での防災教育が定型な場面での訓練にとどまっており、登下校中や保護者のいない場面での訓練や、自ら考えることを促す教育内容の実施は十分でないことを述べた。

幼稚園段階における防災教育に関して、文部科学省(2012)は「安全に生活し、緊急時に教職員や保護者の指示に従い、落ち着いて素早く行動できる幼児」の姿を目標と定めた。東日本大震災の翌年に定められたこの学校防災のための資料でも、大人の指示に従うことが幼児の目標として定められており、主体的に考える防災教育の考え方には至っていない。

このように、学校で行われている防災教育はその質・量共に不十分であり、その内容や実施のしかたを検討し直す必要がある。桜井(2013)は防災教育の課題として、どこも学校や地域でも普遍的に取り組めるような防災教育の体系化、子どもが能動的に学習するための支援、取り組みの成果を学校と地域が連携して広く共有・継承していくことの3つを挙げた。学校が地域と連携しながら新しい防災教育に取り組んでいくことで、学校は防災・減災の文化を築いていく基盤となり得る(藤井・松本, 2014)。

藤井・松本(2014)は、従来の被害想定にとらわれることなく児童生徒が災害時に主体的に判断し、みずから命を守るための行動を起こすための「考える防災教育」と呼ばれる取り組みが広がっていることを述べている。例えば「ショート避難訓練」という初期対応のみの避難訓練の導入がある。これは、緊急地震速報のチャイム音を聞いた児童生徒が自らの判断で「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない安全な場所へ移動し、身を守る対応行動を身に着けさせる訓練である。

従来のように決められた時間にサイレンが流れ、教師の指示に従って行動する訓練とは異なり、児童生徒が自分の力で判断して行動する力が求められる。こうした「想定外」に対応した避難訓練を行うことで、自ら考え判断

する能力を促すと考えられる(村越・村末, 2014)。また藤井・生澤(2013)によれば、避難所生活を体験する防災キャンプなどの取り組みも一部では実施されるようになった。東日本大震災の経験を踏まえて、防災教育に対する根本的な考え方が変化してきたといえる。

しかしこうした新しい防災教育の取り組みは、小学校や中学校では実施されるようになってきたが、幼児教育施設ではまだ十分な取り組みがなされていない。幼児向けの防災教育の教材としては、各種の防災教育絵本や、田爪・松尾・国崎・船入・一井(2006)が作成した「ぼうさいダック」セットなどがある。しかし田爪ら(2006)の「ぼうさいダック」は、教材として実践した成果は報告されていない。

そこで、幼児の生活経験や発達段階にあった「考える防災教育」のプログラムを開発することが急務となってくる。これまでの議論を総合すると、これからの「考える防災教育」プログラムを開発するには、次の3点を考慮する必要がある。

- ①子どもの学習段階や発達段階に応じているか
- ②子どもが自然災害及び防災・減災に対して、興味・関心を持つことに繋がっているか
- ③防災訓練との有意義な関連がみられるか

したがって、防災教育プログラムが教育的な効果あげたかどうかを評価する際に、上記の3つの要件を満たしたかどうかを検討する必要がある。

4. 本研究の目的

これまでの指摘を踏まえて、本研究では幼保連携型認定こども園の年長児を対象とし、現実的で「考える防災教育」プログラムを開発・を実施し、「災害時に落ち着いて行動し、危険を回避することができる状況判断力を身に着ける。」というねらいを設定する。そして前節で述べた3つの要件を満たしたかどうかを検討することによって、プログラムの有効性を評価する。

なお本研究で年長児を対象としたのは、領域「健康」のねらい(3)が達成されたかどうかを判断する際に、年長児の後半に見られる「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」の中に「見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。」という状態像が示されていたからである。年長児を対象とした防災教育プログラムが有効であれば、ねらい(3)が達成され、上記のような姿が見られるようになるはずである。このように、具体的に幼児が育ってきた姿を評価しやすいので、今回は年長児を対象とした。

また、地域と連携した防災教育文化の醸成のためには、行政や地域住民との綿密な打ち合わせが必要である。本研究において第1著者・第2著者は研究を実施したこども園の地域住民とは接点を持っていない。そこで今回は、子ども園の中での教育的効果を検証することとした。

防災教育プログラムの作成

1. 実践の概要

対象児 幼保連携型認定こども園 A 園に在園中の 5 歳児 25 名（男児 13 名・女児 12 名）を対象児とした。

対象園の地理的特徴 A 園の北東方向には川が流れており、洪水ハザードマップでは浸水深約 1.0 m が予想されている。

期間 2018 年 7 月上旬～12 月上旬に実施した。7 月～9 月にかけては、事前調査と防災教育プログラムの立案を行った。9～10 月にかけて 3 回の防災教育プログラムを実施した。11 月～12 月にかけて、プログラムの効果を判定するための事後調査を行った。

手続き 防災教育プログラムを 3 回実施した。また、教育的効果を判断するために、事前にインタビューと対象児の観察を行い、3 回の実践が終了してから事後インタビューと避難訓練の観察を行った。

(1) 防災教育を実施するための準備 担任の保育者を対象に、事前インタビューを行い、対象クラスでの防災教育の実態を調査した。その実態と高橋（2008）、田爪ら（2006）の実践例を参考に防災教育プログラムを作成した。

(2) 防災教育プログラム 防災教育プログラムは、第 1 回：9 月 X 日、第 2 回：10 月 Y 日、第 3 回：10 月 Z 日の 3 回で、各回の所要時間は 20～30 分程度であった。各回の概要は、第 1 回：ぼうさいダック、第 2 回：卵殻の上を歩く体験、第 3 回：揺れたらだんごむし体操であった。

(3) 事後調査 事後調査として、避難訓練のビデオ記録と担任の保育者へのインタビューを行い、実践の教育的効果を検討した。インタビュー項目は避難訓練の実態とねらい、A 園で行っている防災教育についてであった。

倫理的配慮 防災教育プログラムの実施に関して、A 園の園長と第 1・第 2 著者で協議を行った。なお第 1 著者は、A 園を運営する社会福祉法人の評議員を務めており、法人および認定こども園の運営をよりよくするための助言指導を行う立場にある。したがって、A 園の運営が向上され、幼児に対する教育的効果をもたらす保育上の取り組みを法人及び A 園に提言することができる。

3 者での協議の結果、新しい防災教育プログラムを導入することは A 園の子どもと職員にとって有効であるという結論に達したため、子ども個人が特定されないように記述に配慮した上で、プログラムを導入することとなった。こうした経過については社会福祉法人の理事長（当時）についても報告し、実践に関わった職員との連名で本研究を公表することについての許可を得ている。

2. 事前調査

保育者からの聞き取り調査 プログラムの内容を選定するため、まず A 園において避難訓練を行う際の年齢毎の

実態とねらいについて聞き取り調査を行った。その概要を Table 1 に示す。

Table 1 A 園の避難訓練の実態とねらい

年齢	子どもの実態	ねらい
未満児	<ul style="list-style-type: none"> ベルの音で泣く子どもがいる。 避難車を使って避難する。 	<ul style="list-style-type: none"> 落ち着いてベルや放送を聞く。
年少児	<ul style="list-style-type: none"> ベルの音で泣く子はいない。 ベルの音や先生の話聞くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 保育者が主導の訓練なので、先生の話聞き、落ち着いて行動してほしい。
年中児	<ul style="list-style-type: none"> 訓練の経験がある。ハンカチで鼻を隠すなど、自分の判断で先生に言われる前に、行う子どももいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 先生に言われたから避難するという認識ではなく、ベルが鳴ったら危険だと理解して、取り組んでほしい。
年長児	<ul style="list-style-type: none"> 理解度に差があり、災害時に身を守るための訓練と分かっている子どもと、先生に言われたから訓練をすると思っている子がいる。 机の下に隠れる意味やハンカチで鼻を隠す意味を分かっている子と、言われたから行っている子の 2 通りいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 避難訓練の目的を理解し、自主的に行動してほしい。 避難訓練でベルが鳴った時、地震か火災かを理解して動く練習をすることで、実際に災害が起こり、危険が迫った時に身を守るようにしたい。 机の下に隠れる、ハンカチで鼻を煙から守る等の動きを知識ではなく、経験で覚えられようようにしたい。

Table 1 からわかるように、年長児は年少児・年中児の段階での避難訓練の経験があり、保育者の話を聞いて行動することが可能である。しかし、訓練の目的を理解していない子どもや、言われたから行うという受動的な意識の子どももいる。そこで担任の保育者は、訓練をする目的を理解し、主体的に身を守る行動を取ってほしいというねらいを持っている。

次に、A 園で行っている防災教育（避難訓練以外の安全教育を含む）の実施状況について聞き取り調査を行った。防災教育の実施レベルを 3 つに分けて尋ねた。その結果は次の通りであった。

(1) 避難訓練と関連付けて行う教育

- 紙芝居：避難訓練をする際に関連付けて読む。
 - 消防署との連携：避難訓練に関する DVD 視聴、交通指導、放水の様子を見学する等。
- ただし、A 園の幼児は起震車に乗る体験は行ったことがない。怖がる子どももいると思う。
- 「おはしもと」の約束（押さない、走らない、喋らない、戻らない、飛び出さない）について、避難訓練後の振り返りで、合言葉が守られていたかを確認する。

(2) 日常的に行う教育

- 散歩や園外保育などの機会をねらって、月に一回の交通指導を行っている。道の歩き方、危険な場所についての指導を行う（例えば、用水路に近づかない等）。

(3) 保護者・職員を対象とした訓練

- 保護者対象の訓練は、有事の際のために行った方が良

いが、実施していない。

- ・職員対象の訓練：2年に1回の救命救急講習を行っている。全職員参加ではなく、なるべく参加という形を取っている。

以上の結果から、A園は標準的な防災教育を行っているが、まだ改善の余地があると考えられる。

対象クラスの行動観察 行動観察では、①日常生活の中で安全・危険についてどの程度理解できているのか、②災害の危険性を理解したり危険を回避する行動についてどの程度理解できているのか、という2つの観点に着目した。

(1) クラスの様子

①危険な場面での子どもの様子

- ・同じ紙を二人で切ろうとし、ハサミでケガをした子どもがいた。そのため、全員でハサミの使い方について話し合った。保育者が子ども役をし、ケガをした場面を再現することで、「この使い方いいかな」と尋ねる。「だめ。危ない」と子どもたちは答えた。したがって、子どもたちは何が危険な行動であるかを理解しているが、遊びに夢中になっていると安全な行動が実行できない様子であった。
- ・遊戯室の壁に寄りかかっている子どもがおり、ドアが外れてしまった。子どもたちはドアが外れたのを見て、興奮してドアの側に近寄ろうとする様子が見られる。保育者はドアが倒れると、ガラスが割れて破片でケガをしてしまい、危険なことを伝える。ドアに寄りかからずに座るように教え、安全に遊戯室を使うことができるようにする。
- ・身体測定をする際、服を脱いで、保育室内を走っている子どもがいる。保育者は、走っている子どもに、「裸でケガをすると、痛いんだよ」と声をかけている。担任の保育者は、走っている子どもに対して一旦止まって数を数えるように伝える。すると、保育者と一緒に数を数えた子どもは、だんだん落ち着き走るのを止めた。
- ・遊戯室でドッチボールをしているときに、子どもが周りを見ずにボールを追いかけて、遊戯室の机にぶつかりそうになった。保育者は、ボールに夢中で、周りの様子が見えていないことを子どもたちに伝え、安全に気を付けて考えて遊ぶように教えた。

②自然災害に対する危険性の認識

- ・雷を怖がる子どもがいる。「こども園が壊れるかも」と不安そうな様子を見せている。
- ・担任の保育者が朝の集まりの時間に、今日は台風が来ることを伝え、台風では何が起きるかを子どもに尋ねる。子どもたちは「風が強くなる」、「屋根が飛ぶ。家が壊れる」などと答えており、台風で起きることを理解して、自分なりに説明することができる。
- ・担任の保育者は、降園時にこども園を出た後は、親と一緒に行動して身を守るように伝える。また自分の身

は自分で守るように伝え、子どもが自分の身を守る行動を意識できるように促した。

(2) クラスの実態

①危険な場面での子どもの様子

子どもたちは危険な行動そのものについては理解できているが、目の前のことに夢中になると興奮して周りの様子が見えなくなる様子が見られた。保育者は、なぜその行動が危険であるかを伝えて、子どもが危険な状況を回避することを促していた。

②自然災害に興味関心を持つ姿

子どもたちは身近な自然災害に興味を持ち、自分なりの言葉で説明することができている。保育者は、台風が来た時に注意することを伝えることで、災害時に身を守るようにしていた。

3. プログラムのねらいと内容の選定

事前調査の結果から、本調査（実践）のねらいを以下のように設定した。

実践のねらい 防災訓練を行う目的を理解し、災害時に自分の身を守る行動を取ることができるようにする。

取り上げる内容 第1回では「ぼうさいダック」を、第2回では「卵殻の上を歩く体験」を、第3回では「揺れたらだんごむし体操」を実施することとした。

教材の選択理由 ねらいに設定したように、子どもたちには周りの様子を見て"自ら"危険を回避する判断力や行動力を身に着けることが期待される。例えば、地震が起きた際に安全な場所を見つけて隠れたり、周りの大人の指示に従って避難したりすることである。

そのために、まず自然災害の種類とその際に自ら適切な行動を選択するための教材である「ぼうさいダック」を用いることが、防災教育の導入には相応しいと判断した。次に、避難時の危険性を擬似的に体験できる「卵殻の上を歩く体験」を行い、落下物の破片を踏むことの危険性を実体験を通じて感じてもらうことが望ましいと判断した。最後に、防災教育のまとめとして楽しみながら自分の身を守るポーズを覚えられる「揺れただんごむし体操」を実施することとした。

防災教育プログラムの実践

1. 第1回（2018年9月X日 15:30～15:50）

第1回のねらい 楽しく体を動かしながら、災害や日常の危険に備える。

教材 防災教育用カードゲーム「ぼうさいダック」を使用した。これは高橋(2008)が作成した防災教育用カードゲーム「ぼうさいダック」を一部改変したもので、災害場面（地震や津波など）の絵カード（Figure 1）と、これに対応して動物が身を守るポーズを演じている絵カードのセット（Figure 2）から成る。子どもが危険な場面の絵カードを見て、身を守るポーズを取るように、クイズ形式で行った。

オリジナルの「ぼうさいダック」では、地震の時に頭

を守るポーズが「アヒル（ダック）のポーズ」であった。しかしA園では、頭を守る際には「だんごむしのポーズ」をとるように教えていたため、①の絵カードをだんご虫のイラストに変更した。また「ぼうさいダック」には、交通事故・誘拐等の人為的災害や、挨拶・マナー等の生活習慣に関する内容も含まれているが、今回は自然災害に関する内容に限定したので提示しなかった。



Figure 1 ぼうさいダックの災害絵カード



Figure 2 ぼうさいダックのポーズの絵カード

準備物 ぼうさいダックの絵カード 12 枚

- ・危険な場面の絵カード 6 枚：①地震・②津波・③火事・④台風・⑤洪水・⑥落雷
- ・身を守るポーズの絵カード 6 枚：①だんごむし（頭を守る）・②チーター（手を早く振る）・③タヌキ（両手を口に当てる）・④ウサギ（耳に手を当て、話を聞く）・⑤カエル（靴を履く）・⑥カメ（体を丸めてしゃがむ）

実践の経過 巻末資料 1 に掲載した。

第 1 回の実践の成果と課題 以下に、第 1 回の実践を通して見てきた成果（子どもが示した望ましい姿）と、これからの保育の中で育てたい行動、プログラム進行上の課題を述べる。

(1) 実践の成果

- ・「ぼうさいダック」のクイズについて、地震の際のだんごむしのポーズや、火事の際に口を隠すポーズを取ることができた。年長児はこれまでに避難訓練の経験を積んでおり、初期対応のポーズを実行できる。
- ・他のポーズについては、すぐにポーズを取る子どももいれば迷っている子どももあり、回答の早さには個人差があった。しかし、迷っている子どもも周りの様子を見て、身を守るポーズを取ることができていた。
- ・「ぼうさいダック」を通して、自然災害に興味を持つ

様子が観察された。例えば「クイズ楽しかった。チーターの走るの、楽しかった」と話したり、「洪水って何だっけ」「火事の時は何（のポーズ）だっけ」と実践者に尋ねたりしていた。

- ・危険な場面の絵カードについて②津波や④台風、⑤洪水を自分の言葉で説明することができた。例えば、「テレビで見たことあるよ」「雨がいっぱい降るんだよ」と話す様子が見られた。

(2) これからの保育の中で育てたい行動

- ・子どもたちが日常的に「ぼうさいダック」を用いて繰り返し遊ぶことを通して、身を守るポーズを習得してほしい。

(3) プログラム進行上の課題

危険な場面の絵カードを説明する際に、具体的に何が危険なのかを分かりやすく説明する声かけが必要であった。例えば、「火事の煙を吸うと、苦しくなって息ができなくなるんだよ」など、具体的に危険を伝えられると良かった。

また、危険な場面の絵カードについて⑤洪水のカエルのポーズが難しいという子どもがいた。幼児のこれまでの体験では、カエルの絵と靴を履くポーズが結びつかないために難しさを感じたと考えられる。また②火事の絵カードが怖い、口を隠すポーズが苦しいという感想を持った子どもがいた。教材が子どもにとって分かりやすく、恐怖心を感じないものに改良する必要がある。

振り返りの時間について、まだ感想を話したい子どもがいた。その感想を持った理由を、丁寧に聞く声かけが必要であった。

2. 第 2 回 (2018 年 10 月 Y 日 10:30 ~ 10:50)

第 2 回のねらい 地震に関心を持ち、地震発生時の危険性を知り、危険を回避する行動を学ぶ。

教材 国崎・福田・目黒 (2006) による絵本「じしんのえほん こんなときどうするの？」(Figure 3) と、ビニール袋に包んだ卵の殻を 3 つ並べたもの (Figure 4) を用いた。

今回使用した絵本「じしんのえほん こんなときどうするの？」は、通学路・家庭・学校などの場面毎に、地震が起こった際の危険な状況と適切な行動が描かれている。

また 3 つ並べた卵の殻は、地震発生時のガラスや瓦礫に見立てたものである。担任保育者と安全面と衛生面について協議した結果、卵殻の上を裸足で歩くのではなく、ビニール袋に入れた卵殻の上を靴下を履いた状態で歩くことにした。この卵殻を約 50 セット用意し、靴下で歩いた状態と靴を履いて歩いた状態を比較し、どちらが危険かを判断し、適切な行動（靴を履いて避難すること）の大切さを学ぶための教材である。

A 園の未満児・年中児の中に卵アレルギーの子どもがいるため、年長児クラスの外に卵殻の破片が落ちないように、段ボールの上に卵殻を乗せ、ビニールで密封したものを用意した。この卵殻のセットをこまめに取り換え

ることで、子どもが怪我をしないようにした。



Figure 3 じしんのえほん



Figure 4 袋に入れた卵の殻

- ・左 3つ並べた状態
- ・右 1つの袋の拡大図

準備物：絵本「じしんのえほん こんなときどうするの？」・瓦礫と足跡の絵

卵殻セットの下に敷く新聞紙・卵殻セット

実践の経過 巻末資料2に掲載した。

第2回の実践の成果と課題

(1) 実践の成果

- ・絵本「じしんのえほん こんなときどうするの？」の読み聞かせでは、絵を見て危険な場面を想像することができた。また地震が来た時にどこに隠れるかを、考えることができた。
- ・卵殻の上を歩く体験についてガラスの上を歩くと危険だが、靴を履くと安全なことを実感できた。例えば、実践後、「卵の殻、痛かった」「でも靴を履いたら大丈夫だった」と話している姿が観察された。

(2) これからの保育の中で育てたい行動

- ・地震に遭った時の危険を知って、現実感を持って避難訓練に取り組んでほしい。例えば、窓に近付かない、きちんと靴を履いて避難する等の行動を取って欲しい。

(3) プログラム進行上の課題

絵本の読み聞かせについて、地震が来たことを表すためにわざと絵本を揺らす動作を行った。しかし「揺らすのやめてほしい」と言う子どもがいた。絵が見えにくかったと考えられる。

読み聞かせの際に次のプログラム(卵殻の上を渡ること)の時間のことを気にしてしまい、早口で読んでしまった。

活動の説明をする際に卵殻のセットを見せなかったため、卵殻の上を歩く体験について「嫌だ」と抵抗感を感じる子どもがいた。卵殻のセットを見せて、活動の見通しが持たせるべきであった。

卵殻の上を歩く体験について、衛生面に配慮すること

ができていた。卵殻のセットを約50個用意したことで、こまめに交換ができ、卵殻の破片が外に出ることはなかった。ただし、実践後に担任保育者が掃除機をかけており、実践後の片付け・清掃のことまで考慮すべきであった。

3. 第3回 (2018年10月2日 11:15～11:35)

第3回のねらい 災害の際に自分の身を守る動きを自ら考える。

教材 宇部・菅野(2015)による絵本「はなちゃんのはやあるき はやあるき」(Figure 5)と、防災の歌「じしんだ!だんだんだん」を改変した「揺れたらだんごむし体操」を行った(Figure 6)。防災の歌の中で第1回に学んだ「ぼうさいダック」の中の①だんごむし・②チーター・③タヌキのポーズを取り、身を守る動きを復習した。



Figure 5 はなちゃんのはやあるきはやあるき

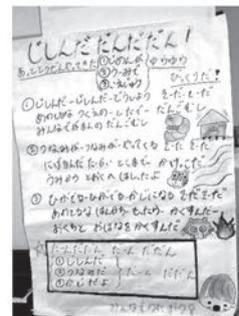


Figure 6 じしんだんだんだんの歌詞

準備物 絵本「はなちゃんのはやあるき はやあるき」CD「じしんだ!だんだんだん」・CDプレーヤー・歌詞を書いた模造紙

実践の経過 巻末資料3に掲載した。

第3回の実践の成果と課題

(1) 実践の成果

- ・絵本「はなちゃんのはやあるき はやあるき」を通して、自然災害に興味関心を持つことができていた。例えば、津波の大きさに驚いたり、登場人物を心配したりする様子が見られた。
- ・揺れたらだんごむし体操について身を守るポーズを取ることができていた。ぼうさいダックのクイズが身を守るポーズの習得に繋がったと考えられる。例えば、実践後に「ウサギのポーズしたかった!台風の際は、よく聞こうのポーズ」と言っている子どももいた。

(2) これからの保育の中で育てたい行動

- ・避難の練習をすることの大切さを日常的に理解し、避難訓練等で素早く自分の身を守る行動を取れるようになって欲しい。

(3) プログラム進行上の課題

絵本の中で「避難車」、「仮設住宅」など、子どもが聞き慣れない言葉があった。こうした用語については、幼児にわかりやすく説明できるように準備しておく必要がある。

CDで音楽を流す際に音が流れないというアクシデントがあり、隙間の時間が生じてしまった。今回は担任保育者の提案でぼうさいダックのクイズをすることができたが、今後は隙間の時間が生じてしまったときに行う活動も考えておく必要がある。例えば、歌詞と一緒に読む、伴奏なしで歌う練習をしてみる等である。

歌「じしんだんだんだん」について、最後のフレーズで子どもたちの声が大きくなった。子どもたちにとっては初めて歌う歌であったので、歌を覚える時間が必要である。

防災教育プログラムの効果の検討

1. 事後調査の概要

防災教育プログラムの教育的効果を検討するため、次の方法でデータを収集した。

避難訓練時の行動観察評 第1回の防災教育プログラムの終了後と、第3回のプログラム終了後に園の行事として避難訓練が実施された。第1回終了時の避難訓練は、参与観察を通して子どもの行動を記録した。第3回終了後の避難訓練はその様子を録画し、子どもの姿を文字化した。また防災教育実践後の避難訓練の子どもの変化について、避難訓練を担当する保育者の幼児に対する講評も資料として記録した。

防災教育に関する聞き取り調査 担任保育者と施設長（園長）に対して、防災教育の実施に関する聞き取り調査を行った。

(1) 担任保育者への聞き取り インタビューは11月中旬にA園の年長児クラスで、担任保育者を対象として20分程度行った。インタビュー項目は以下の5点である。

- ①実践後の避難訓練での子どもの姿に変化は見られたか。
- ②教材や実践は、子どもの実態に合っていたか。あるいは、子どもたちは難しさを感じていたか。
- ③保育現場で防災教育を行う際に、使いやすい教材と使にくい教材はどれか。
- ④防災教育に割く時間を設けることは、園にとって負担に感じるか。
- ⑤避難訓練について 今までのねらいと、これから子どもたちに願うことは何か。

(2) 施設長への聞き取り 12月中旬に社会福祉法人の本部事務局で、園長として防災教育を行う時間を設けることに対して、負担を感じたかを尋ねた。

2. 避難訓練の様子

第1回の実践終了後に行われた避難訓練 行動観察と担任保育者からの聞き取りの結果、及びプログラムの効果についての考察は以下の通りである。

(1) 避難訓練中の子どもの行動

- ・好きな遊びの時間にサイレンが鳴ったが、おもちゃで遊び続けようとしたり、友達に話しかけたりする子どもがいた。
- ・避難訓練の前にA児とB児が言い合いになっていた。第2著者がちょうどA児から話を聞こうとしていたところだった。じっくり話を聞けないまま訓練に入ったので、机の下でA児は話そうとしている。第2著者が「しー」と声をかけたが、「後からお話聞くよ。今は避難訓練だから、静かにしようね」などの声かけが必要だった。
- ・保育者は全員の帽子を出し、誰の物でもいいから、もらったものを被って並ぶように伝える。D児は「自分の（帽子）じゃない」と言って、自分の帽子を探し始めた。
- ・廊下を歩く際、E児は立ち止まって靴を履き直そうとしていた。F児はおもちゃをポケットに入れており、E児とは手を繋がずに前に進もうとしていた。保育者は、自分で自分の身を守るために逃げる練習をしていることを伝え、手をしっかり繋いで歩くように声をかけた。

(2) 避難訓練担当の保育者の講評

- ・おもちゃを持ったまま逃げている子どもがおり、訓練担当の保育者が話している最中にもおもちゃを触っていた。
- ・講評として、サイレンが鳴ったら遊びをやめて、おもちゃを持たずに逃げるように指導した。

(3) 第1回防災教育プログラムの効果 第1回のプログラムの効果は、ほとんど見られなかった。サイレンが鳴っても遊び続けようとしたり、机の下で話そうとしたりする等、遊びから訓練への気持ちの切り替えが難しい様子が見られた。ただし、机の下に隠れることはほとんどの子どもができていたため、それはこれまでの避難訓練の経験によるものだと考えられる。

すぐに安全な姿勢（だんご虫のポーズ）を取ることにについては、第3回の「揺れたらだんごむし体操」でだんごむしのポーズを練習する中で今後の改善が期待される。またおもちゃを持ったまま避難する子どもがいたが、第2回の「じしんのえほん こんなときどうするの?」を内容を通して、地震が起こった時の身の守り方を考えるきっかけになると考えられる。

第3回の実践終了後に行われた避難訓練 行動観察と担任保育者からの聞き取りの結果、及びプログラムの効果についての考察は以下の通りである。

(1) 避難訓練中の子どもの行動

- ・朝の集まりの時間に、サイレンと地震を知らせる放送

が流れ、すぐに隠れるように指示があった。大半の子どもたちがすぐに机の下に隠れ、だんごむしのポーズを取ることができていた。

- A児はどこに机に隠れるかが分からず、立ち尽くしていたので、保育者が空いている机の下に誘導し、隠れるように促す。
- 机の下で話をする子どもがいる。保育者は喋らないように声をかける。
- 机の中に体が入りきっていないB児に対して、もう少し机の中に入るように促し、子どもが安全に隠れられるようにする。
- 窓際の机の下に隠れた子どもたちがいたので、保育者は、頭を守り机の内側に入って隠れるように促した。ガラスが落ちた時に怪我をしないように注意を喚起した。
- 保育者は、子どもたちに渡された帽子を被って並ぶように伝える。誰の帽子かが気になって、話をする子どもがいた。
- 前はなかなか帽子を被らなかったC児は、帽子を選ぶようとする行動は見られたが、自分で帽子を取ってすぐに被ることができていた。
- 避難する際に、友達と繋いでいない方の手でハンカチを持つようとする子どもがいた。保育者は火事ではなく地震の避難訓練なので、ハンカチは触らないことを伝えた。逆に言えば、煙を避けるためにハンカチを使用することが定着しつつあると考えられる。
- 途中で立ち止まることなく、廊下を歩いて避難することができた。10月の訓練では立ち止まっている子どもや手を離してしまう子どもがいたが、今回はいなかった。
- D児は帽子が気になり、被ったり脱いだりしていた。D児の落ち着かない様子を見て、保育者が帽子のゴムを顎の下に通し、D児が集中できるように援助した。
- 避難場所の駐車場では、ほとんどの子どもがお山座りをして待つことができていた。
- 10月の訓練ではおもちゃを避難場所まで持ち込んだ子どもがいたが、今回はおもちゃを持ってきた子どもはいなかった。

(2) 訓練担当の保育者による講評

- 保育者が子どもたちに何の訓練かを尋ねると、地震の訓練だと答えることができた。年長児はベルと放送が鳴った回数も答えており、放送を正確に聞き取ることができている。
- 訓練担当の保育者は絵カードを見せながら、机の下でだんごむしのポーズができたかを尋ねた。年長児クラスでは第2著者と一緒に練習したことにも触れ、子どもたちがプログラムでの経験を思い出せるようヒントを与えた。
- 保育者は、ガラスの破片の上を裸足で歩いている絵カードを見せ、きちんと内履きズックを履けているかを尋ねた。地震が起きて、ガラスが割れて散らばった

廊下で、ガラスを踏んだらどうなるかを問いかけ、子どもが危険な場面を想起できるように声をかけた。子どもたちは「血出る、怪我する」と答えており、避難するときに靴を履かずに歩くと、危ないことを理解できている。

- 保育者は、靴を履かないと足が切れて血が出て怪我をすることを伝え、普段から靴をきちんと履くように指導した。
 - 訓練担当の保育者が、帽子を上手に被ることができていない子どもがいたことを伝えた。訓練の担当者は、担任の保育者に、普段から外に出る際に、帽子の着用を徹底するように伝えた。
- ## (3) 訓練後のクラスにおける振り返り活動の様子
- 担任保育者が「地震の時はまずどうするの?」と尋ねると、多くの子どもが「机の下でだんごむしになる」と答えている。地震の時の身の守り方を正しく理解している。
 - 担任保育者は、地震の避難訓練は初めてではないことから、以前の経験を思い出しながら行ってほしいことを伝え、子どもたちが経験で自分の身を守ることを覚えるように促した。
 - 担任保育者は、机の下に隠れることが素早くできていたことを賞賛し、達成感を持てるように配慮した。
 - 机の下でおしゃべりする人もいたことを伝え、子どもたちにおしゃべりすると何がいけないかを尋ねた。子どもたちは「放送が聞こえなくなる」と答え、静かにすることの意味を理解している。
 - 担任保育者は、地震が起きると、いつ揺れが収まって放送が流れるかが分からないため、静かに待つように指導した。
 - 担任保育者が放送で流れていた避難場所を尋ねると、E児は「第2避難場所」と答え、正しく放送を聞き取っていた。
 - 担任保育者が、もし避難場所を間違えたらどうなるかを尋ねると、子どもたちは「離れ離れになる」「迷子」と答えており、もしもの場면을想像できていた。
 - 担任保育者は、全員が同じ場所に避難しないと安全が確認できないことを伝え、机の下に隠れた後は、喋らないことを確認した。
 - 「おはしもと」の約束のうち「喋らない」を守っていた人がたくさんいたことや、避難場所でお山座りができていた人がたくさんいたことを伝え、子どもの成長を賞賛した。
 - 本当に地震が起きた時に話をしていると、助かるはずの命も助からないかもしれないことを伝え、大事な約束として「喋らない」ことを再確認した。
 - 今日の訓練での話を保護者とも話し合うように伝え、家庭でも災害時の行動を共有できるように促した。
- ## (4) 全3回にわたる防災教育プログラムの効果
- ほとんどの子どもが、素早く机の下に隠れ、だんごむ

しのポーズを取ることができていた。「ぼうさいダック」や「揺れたらだんごむし体操」を通して、だんごむしのポーズを練習した成果が表れたと考える。また訓練担当の保育者は「だんごむしのポーズ」や「ガラスの上は裸足で歩かない」等、実践での「ぼうさいダック」や「卵殻の上を歩く体験」に関連する指導を行っていた。したがって今回の防災教育プログラムの内容は、A園での防災教育の実態に合っていたと考えられる。

一方で、訓練中に話をしている子どももいた。しかし、訓練後の振り返りでは、先生の話覚えていたり、訓練中に静かにする理由を話したりすることができる様子が見られた。このことから、子どもたちは避難訓練を行う目的を理解したり、先生の話をよく聞いたりすることはできている。ただし実際に災害が起こったと想定して、訓練に取り組むことが難しいと考えられる。この点は今後の課題である。

3. 聞き取り調査の結果 担任保育者と施設長への聞き取り調査の結果は以下の通りである。

(1) 担任保育者への聞き取り調査

5つの項目に対する担任保育者の回答は次の通りである。

- ①実践後の避難訓練での子どもの姿に変化は見られたか。
 - ・だんごむしのポーズは、前より上手になり、すぐにできるようになった。だんごむしのポーズを、時間をかけて練習する時間があつたため、成果が出ていた。
- ②教材や実践は、子どもの実態に合っていたか。あるいは、子どもたちは難しさを感じていたか。
 - ・(プログラムの内容は) 難しいとは感じなかった。卵の殻の上を歩く体験など、実際に体験できるところがよかった。避難訓練はできても、なかなかガラスを踏む感触を体験する機会を作るのは難しい。
 - ・年長児を対象としたのは適齢期だった。年長児だからこそ、卵殻を踏む体験とガラスの上を歩く感触がうまく結びついた。年少児、年中児だと、卵殻の上を踏んで楽しい、という気分で終わっていた可能性がある。
- ③保育現場で防災教育を行う際に、使いやすい教材と使にくい教材はどれか。
 - ・防災教育の絵本は、簡単に利用できると思う。今まで、交通安全の紙芝居は読むことがあった。しかし、(地震などの) 防災教育の絵本は初めて見た。防災教育の絵本が子ども園にあつたら、使えると思う。
 - ・卵殻は準備する時間もないため、(卵殻の上を踏む体験は) 現場ではできない。外部からの援助がないと、実際には難しい。
- ④防災教育に割く時間を設けることは、園にとって負担に感じるか。
 - ・3.11などがあり、近くに川もあるので、(防災教育の) 必要性は感じている。ただし、時間を捻出できない。特に年長児は行事が忙しく、時間を作るのが難しい。
- ⑤避難訓練について、今までのねらいと、これから子ども

たちに願うことは何か

今までのねらい：

- ・非常ベルと先生の話をしっかり聞いて、落ち着いて行動すること。
- ・地震の訓練では、だんごむしのポーズを取って体を守られていること。

これからの子どもに願うこと：

- ・(事前の聞き取りでは、訓練を行う目的を理解して取り組んでほしいと言ったが、)「なんで？」と理由を聞いたら答えることができるので、避難訓練を行う目的や意味は理解できていると思う。
- ・子どもたちも実際に火事や地震が起きているわけではないので、(本当に災害が起きた時のように避難するのは) 難しい。避難訓練として、先生の話を知ったり、自分の身を守ったりすることはできていると思う。
- ・災害が起こった時に大人がどれだけ避難させられるか、子どもが自分自身でポーズを取ったり、身を守ったりする行動ができるかが大事だと思う。

(2) 施設長への聞き取り調査

A園の園長からは、防災教育プログラムに対して子どもたちは素直に真剣に取り組んでおり、職員にとっても防災教育について再確認できるきっかけになったとの回答を得た。ただし今回のような卵殻は準備に時間がかかるため、防災教育用の紙芝居やDVD等を自分たちで作ってもよいという意見があった。

全体的考察

1. プログラムの教育的効果について

本研究の目的である「幼児期の発達段階に応じた地震防災教育プログラムを作成・実施し、幼児に対する地震防災教育の有用性の検証を行う」より、全3回にわたる実践の教育的効果を次の3点から検証する。

- ①子どもの学習段階や発達段階に応じているか
- ②子どもが自然災害及び防災・減災に対して、興味・関心を持つことに繋がっているか
- ③防災訓練との有意義な関連がみられるか

学習段階や発達段階について 行動観察より、第2回の「卵殻の上を歩く体験」の実践後に「卵の殻、痛かった」「でも靴はいたら大丈夫だった」という会話がみられたことから、ガラスの破片等の上を裸足で歩くと危険だが、靴を履くと安全なことを実感していることがしめされた。また、担任の保育者からは、第2回の「卵殻の上を歩く体験」について年長児に相応しい内容であったという回答が得られた。したがって、第2回の内容は年長児に相応しい内容であったといえる。

また防災教育の絵本については、担任保育者より保育現場で負担なく利用可能だという回答が得られた。したがって、今回のプログラムで使用した2冊の防災教育絵本は適切であったと考えられる。

自然災害及び防災・減災への興味関心について 行動観

察より、第1回の実践「ぼうさいダック」を実施した後に「クイズ楽しかった。チーターの走るの楽しかった」という声や、「洪水って何だっけ」「火事の時は何のポーズだっけ」と尋ねたりするなど、ぼうさいダックを通して、自然災害に興味を持っている様子が見られた。

また第3回の「揺れたらだんごむし体操」の実践中に、「他のポーズもしたい」と言う発言があり、子どもにとって身近な動物が出てくる教材（ぼうさいダック）を用いたことで、身を守る動きを覚え用とする意欲につながったと考えられる。

さらにA園の園長から、子どもたちは素直に真剣にプログラムに取り組んでいたという回答が得られたことから、自然災害と自分の身を守る行動について興味関心を持つきっかけになったと考えられる。

防災訓練との有意義な関連について 行動観察からは、第3回の「揺れたらだんごむし体操」の際に歌に合わせてだんごむしやチーター、タヌキのポーズを取ることができたことから、身を守るポーズが定着している様子が見られた。担任保育者から避難訓練においてだんごむしのポーズが上手になったとの回答が得られ、実施した防災教育と訓練の関連が見られた。

このように、実施した防災教育プログラムは①、②、③の条件を概ね満たすものだったと考える。ただし、実践後の避難訓練で私語が見られるなど、実際に災害が起こっていると想定して訓練に取り組むことが難しい様子も見られた。

また、問題と目的の部分で触れたように、幼児が自ら危険を判断し安全な行動をとれるようにするための「考える防災教育」が十分に実施できていたかという点、3回にわたる防災教育プログラムだけでは不十分だったと言わざるを得ない。今回は2回目の避難訓練の際に多くの子どもが適切にだんごむしのポーズを取ることができたが、落下物の有無を自ら判断した上で広いスペースに移動してだんごむしのポーズを取るなど、状況の危険性を主体的に判断する段階にまでは至らなかった。

こうしたプログラムの結果を踏まえると、今後は防災教育と避難訓練を密接に関連付け、子どもの状況判断力を養うためには、プログラムの内容や実施方法に改善が必要である。以下では、本研究の結果に基づいた今後の課題・提言を、防災教育プログラムの作成・実施と、防災教育そのもののあり方について、という2つの観点から述べる。

2. プログラムの作成・実施上の課題

本研究では、3回にわたる防災教育プログラムに関する一定の教育的効果が得られた。しかし各回の題材・使用した教材・プログラムの展開については改善すべき点が見られた。以下ではプログラム作成上の課題について述べる。

まず「ぼうさいダック」では、④台風時のウサギや⑤洪水時のカエルのポーズについて疑問を持つ子どもがい

た。動物のポーズが幼児教育の現場に合っていない場合もあり、実践園での実態に合わせて改良が必要だと考える。

たとえば今回実践を行ったA園の実態に合わせるならば、台風の際は「ダンボの耳で聞こう」や「お山座りで聞こう」といったポーズ等が考えられる。

また②火事の絵カードが怖いという感想を持った子どももいた。藤井・川原崎（2017）が指摘するように「脅さない」防災教育を行うには、恐怖心を与えない絵や言葉を使うことが重要である。そして、各園に合った「ぼうさいダック」のポーズを子どもたちが覚えて、災害時にも身を守るができるように、日常的に絵カードを使って遊ぶ環境が必要だと考える。

次に卵の殻の上を歩く体験について、実践後に担任保育者が掃除機をかけていた。隣のクラスには卵に対するアレルギーのある子どもがいたため、卵殻のセットを片付けた後の配慮が必要であった。今回は卵アレルギーの子どもが対象のクラスにいなかったため卵殻を使用した。今後は健康上の配慮が必要な子どものことを考え、石や貝殻等で代用できるものがないかを検討する必要がある。

さらに、「揺れたらだんごむし体操」について、歌の3番を「大人の人に知らせたよ まわりの人に知らせたよ」から、「ハンカチ持ったら隠すんだ お口とお鼻を隠すんだ」に変更し、③火事のタヌキのポーズが取れるようにした。しかし、実際に火事が起きた際には周りの大人に知らせることも重要なことなので、変更前の歌詞についても子どもに説明することが必要であった。

今後は、防災教育プログラムを実施する幼児教育施設の実態に合わせて様々な教材・展開案を開発し、教育的効果を検討していく必要がある。

3. 今後の防災教育のあり方について

本研究の結果を踏まえ、幼児教育の現場で防災教育を普及していくうえで、今後の課題を3点挙げる。

(1) 防災の「日常化」

防災教育を日常的に、継続して行うことができるようにするためには、取り組みやすい教材が必要である。幼児教育の現場における、防災教育の絵本や紙芝居、DVD等の普及が求められる。また実体験による学習として地域の防災センターにある体験型学習施設を利用すること等が考えられる。

さらに、防災教育を年間の学校安全計画の中に組み込み、どのように日常の保育と関連付けて展開していくかを考えることが必要である。例えば、A園では、避難訓練年間計画について、年間目標と期間目標、月ごとのねらいが設定されている。そのねらいに基づいて子どもの行動・災害想定・指導上の留意点等の計画が緻密に立てられている。特にA園の園長は、訓練をいかに日常化させるかという点に言及していた。年間の学校安全計画を立てる際に、避難訓練等の行事だけでなく日常的な防災教育を連動させることで、防災意識を持続させることに

繋がるであろう。

(2) 低年齢児を対象とした防災教育

A園では未満児クラスにおいて、歌「わ〜お」の「だんごむし、だんごむし」という部分で、四つ這いの練習をする。また「机の下に隠れて」の部分で「だんごむしになって隠れましょう」と言うことで、初期対応のポーズを分かりやすくしている。

今回は年長児を対象としたプログラムの開発を試みたが、より低い年齢の子どもに対しては、遊びの中で楽しみながら、安全の姿勢や避難の仕方についての体験を積み重ねることが重要である。藤井・松本(2014)は、身体活動に防災の意識を組み込んだ、「命を守るリズムランニング」という特別支援学校における取り組みを紹介している。この活動では、音楽に合わせて身体を動かしながら、初期対応のだんごむしのポーズや、アリさん歩きで一列になって歩く避難方法などを身に着けることができる。このように、様々な実践の成果に対して保育者が常に情報を検索し、低年齢児に合った活動を構築していく必要がある。

(3) 防災意識を育てる避難訓練

子どもの防災意識を育てるために、高橋(2008)が指摘するような「震災の恐ろしさを正面から受け止めた質の高い」防災教育を行うことが必要である。すなわち、実際には建物が揺れておらず、落下物も相安全な園舎や園庭での避難訓練ではなく、災害の危険性を実感できるような体験を積むことも必要である。

千葉県九十九里町立片貝幼稚園では、東日本大震災が発生した際に、ほとんどの子どもが「怖い!」と叫んだり教師にしがみついたりして、避難訓練の通りに園庭に避難することができなかったと報告されている(注)。こうしたことを防ぐためには、例えば起震車に乗る体験や、通常とは異なる状況での避難訓練が挙げられる。

H24年度に東京都の安全教育推進校に指定された文京区立名化幼稚園では、随時抜き打ちの避難訓練を実施している(注)。また野津・上原・上野・小島・小林(2017)は、東日本大震災の教訓を生かした避難として、石巻市にあるB保育園のあらゆる時間・場面での訓練を紹介している。抜き打ち訓練や園外活動での訓練等、特別の避難訓練を行うことで、様々な状況での避難方法を子どもたちが経験できる。あらゆる時間と場面を想定した実践的な避難訓練を受けることは、子どもたちが災害時に自らの安全を判断した上で保育者の指示に従い、落ち着いて行動する態度を育むことになるであろう。

引用文献

藤井基貴・生澤繁樹 2013「防災道徳」の授業開発に関する研究―「道徳教育」と「防災教育」をつなぐ授業理論と実践― 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, **21**, 91-101.

藤井基貴・川原崎洋 2017 防災教育のための絵本教材

の開発―風水害を題材とした防災絵本『ぐるぐるぐもがくるぞ!!』の製作― 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, **26**, 233-240.

藤井基貴・松本光央 2014 知的障がいがある児童生徒に対する防災教育の取り組み―岐阜県可茂特別支援学校の事例研究― 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, **22**, 73-81.

北林雅洋 2013 東日本大震災の被災地調査の報告―大川小学校を中心に― 日本理科教育学会四国支部会報, **32** (国立国会図書館デジタルコレクションファイル名:ART0010331640.pdfを閲覧)

厚生労働省 2017 保育所保育指針

文部科学省 2012 学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開―第2章 学校における防災教育― Pp.8-10.

文部科学省 2017 幼稚園教育要領

村越真・村松由貴 2014 静岡県の小中学校における防災教育の実態と課題 教科開発学論集, **2**, 1-10.

内閣府 2012 子ども・子育て白書 第5章 東日本大震災の被災地等における子ども・子育てに関する対応 Pp.150-151.

内閣府・文部科学省・厚生労働省 2017 幼保連携型認定こども園教育・保育要領

日経アーキテクチャ 第1123号(2018年7月12日付) 大川小学校津波訴訟「防災計画」の過失を認定:ハザードマップは「結論として誤り」、石巻市などに14億円賠償命令[仙台高裁18.4.26](Special Feature 震災裁判:相次ぐ地震で問われるプロの責任)

桜井愛子 2013 わが国の防災教育に関する予備的考察―災害リスクマネジメントの視点から― 国際協力論集, **20**, 147-167.

田爪宏二・松尾知純・国崎信江・船入公孝・一井康二 2006 3章自分の身を守れる子どもを育て、子どもを守れる環境をつくるために―大人と子どもが一緒に取り組む防災教育プログラム― 社団法人土木学会 巨大地震災害への対応検討特別委員会 地震防災教育を通じた人材育成部会(編著)『一から始める地震に強い園づくり』幼稚園・保育園のための災害対策・防災教育ハンドブック, 学研教育総合研究所 Pp.35-48.

高橋多美子 2008 地域と連携した幼児期における地震防災教育の普及 保育学研究, **46**, 163-173.

(注) NHK 総合テレビジョンで2013年2月3日に放送された「サキどり」において、九十九里町立片貝幼稚園と文京区立名化幼稚園の取り組みが紹介された。片貝幼稚園では、東日本大震災の発生時に幼児が怖がって適切に避難ができなかった。それを踏まえて園長が名化幼稚園の実践を見学に行き、避難訓練のあり方を改善する様子が放映された。

名化幼稚園は(当時)東京都の安全教育推進校に指

定されており、抜き打ちの避難訓練が頻繁に行われていた。非常ベルと緊急放送を聞くと、園児は自ら自分の安全を守る行動をとっさに実行していた。地震の場合には、机等の下に隠れるか、ガラスや照明器具が落ちない場所を自ら見つけて"ダンゴムシのポーズ"を取っていた。したがってこの実践からは、事前に訓練があることを知らされていなくても、年中児の段階から自ら安全を考えることが可能であると思われる。

付記

本研究は、第2著者が富山大学人間発達科学部に提出した平成30年度特別研究論文を、第1著者の責任で大幅に改稿したものである。本研究において、第1著者は

研究全体の統括を行い、第4著者と協力して防災教育プログラム実施の計画を立案した。第2著者は各回の防災教育プログラムの立案・実践を行った。第3著者は防災教育プログラムの立案・実践を補助した。

謝辞

本研究の実施に対してご協力頂いた、社会福祉法人富山YMCA福祉会の松田誠一理事長（当時）に心より感謝申し上げます。

(2019年9月2日受付)

(2019年10月2日受理)

<p>実践者、担任保育者の働きかけ・言葉かけ T: 椅子に座って絵カードを見せる。 C: 椅子を持たずに円状に座る。 ぼうさいダックの絵カードについて、説明をする。</p>	<p>クラスの子どもたちの様子 C: 椅子を持たずに円状に座る。 T: ①地震の絵カード(ナマズが暴れている絵)を見せ、「何の絵でしょう」と問いかけ T: 「グラグラ揺れるよ」と声かけする。 T: 「地震が来たら、何のポーズだっけ」と尋ねる。 T: だんごむしの絵カードを見せながら、「だんごむしのポーズをしてみよう」と呼びかける。 H: 「Cちゃんやらないんだ。先生はやろう」といって T: ②津波の絵カードを見せ、「2番! 何だ。大きな波が家の近くまで来ているね。」と尋ねる。 T: 「津波って聞いたことあるかな。地震の後、皆の所まで波が来て、家や建物を流すことだよ」と声かけする。 T: 「どうやって逃げた方がいいのかな」と問いかけながら、チャーターの絵カードを見せる。 T: 「両手を振って、チャーターみたいに早く逃げよう。海にいるときに地震にあったら、できるだけ高いところに逃げるんだよ」 T: 「津波の時は、チャーターのポーズだよ」 T: ③火事の絵カードを見せ、「何だ」と声かけする。 T: 「(火事の)避難訓練のおはしもの約束何だっけ」と問いかける。 T: タヌキの絵カードを見せ、「火事の際は、タヌキのポーズ」と声かけする。</p>
--	--

<p>T: 「煙にはたくさん危険なものが入っているから、吸わないように口を隠そう」 T: 「煙を吸うと危険なんだよ。おはしもの約束を守って、タヌキのポーズで逃げよう」</p>	<p>C: 「危険なもの?」 C: 「風吹いとる」 C: 「風吹いて砂が目に入る」「(木や建物が)倒れる」 C: 「風吹いとる」 C: 「風吹いて砂が目に入る」「(木や建物が)倒れる」 C: 「なんで」「違うよ。こうだよ」と頭の上に乗って、ウサギの真似をして眺める。 C: 保育者の真似をして耳に手を当てている。 C: 「先生の話をよく聞こう」のポーズだよ」と言 T: 「地震や津波は分からないけど、台風はいつ来るか分かるから、おうちの人や先生の話をよく聞こうね」 C: 「分かるの」 T: 「天気だから、いつ来るか分かるんだよ」と声をかける。 C: 「雨がいっぱい降るんだよ」「車の中に洪水だよ。雨がたくさん降って、水が入ってくるんだよ」と声かけする。 T: カエルの絵カードを見せ、「靴を履いて逃げる準備をしよう」と呼びかける。 T: ④雷の絵カードを見せる。 T: 「雷は高い場所やがったものに落下しやすいんだよ」 T: 「カメのポーズで体を守ろうね」と声かけする。 C: その場でカメのように丸くなる子どももいる。 T: 「外に出ないことが一番大事だよ」と確認する。 C: 「はい」 T: 広がるように伝え、実際にポーズを取ることができるようにする。</p>
--	--

<p>ぼうさいダックのクイズをする。</p>	<p>T:「①地震の絵カードを見せる。」</p> <p>C:「すぐにだんごむしのポーズを取っておい、反応が早い。」</p> <p>T:「②津波の絵カードを見せる。」</p> <p>H:「ヒントちょうだい」と声をかける。</p> <p>T:「ヒントとして、チャーターの絵を見せる。」</p> <p>T:「③火事の絵カードを見せる。」</p> <p>T:「④台風の絵カードを見せる。」</p> <p>T:「聞きましよのポーズだよ」と声をかける。</p> <p>C:「全員がウサギの靴を取っている。」</p> <p>T:「⑤洪水の絵カードを見せる。」</p> <p>C:「迷っている子もいたが、周りの靴を見てカエルの靴を履くポーズを取っている。」</p> <p>T:「⑥雷の絵カードを見せる。」</p> <p>C:「わざとポーズを取らずに、見ている子どもがいる。」</p> <p>C:「体を低くする亀のポーズを取る。」</p> <p>T:「クイズはおしまい」と呼びかける。</p> <p>C:「もつとやりたい」「まだする」と言う。</p> <p>C:「最後に②津波のカードを見せる。」</p> <p>C:「すぐに「チャーター」のポーズを取る。」</p> <p>C:「楽しくなって、走り始める。」</p> <p>T:「クイズはおしまい。座って話をして、終わろうね」と声をかける。</p> <p>C:「走っていた子も座り、落ち着いた様子になった。」</p>
<p>活動の振り返りをする。</p>	<p>T:「今日のクイズはどうだったかな」と問いかけ、感想を聞く。</p> <p>C:「楽しかった」「難しかった」と感想を言う。</p> <p>T:「何が難しかったかな。何色のカードかな」と尋ねる。</p> <p>C:「絵カードの番号を答えようとする。」</p> <p>T:「絵カードを順番に見せ、答えやすいようにする。」</p> <p>C:「周りの子どもたちが⑤(カエルの靴を履くポーズ)じゃない?」と言うと、「うん」と頷く。</p> <p>T:「靴履くのが難しかった?」と尋ねる。</p> <p>C:「もう一度聞く。(次ページに続く)」</p> <p>T:「他の子どもにも感想を聞く。」</p> <p>C:「苦しかった」「絵が怖かった」</p>

<p>T:「どうしてかな?」と理由を聞く。</p> <p>C:「口を隠しながら「こうするのが苦しかった」と話す。」</p> <p>T:「口隠すの苦しいよね」「絵がちよつと怖かったね」と声をかける。</p> <p>C:「(絵の)目がこうなっていた(釣り上がっていた)」と言う。</p> <p>T:「今日はこれでおしまいだよ」と声をかける。</p> <p>C:「もつと話したい」と言う。</p>	<p>C:「じゃあまたポーズ使って遊ぼう」と呼びかける。</p> <p>H:「みんな覚えないの?先生は覚えようつと。大事なんだよ」と声をかける。</p>
---	--

C: 子ども, T: 実践者 (第2 著者), H: 補助者 (第3 著者)

巻末資料2 第2回の防災教育プログラムの実践

<p>実践者、担任保育者の働きかけ・言葉かけ T: 椅子に座り、全員に絵本が見えるようにする。</p>	<p>クラスの子どもたちの様子 C: 椅子を持たずに、3列に座っている。3列目の子どもたちは椅子に座っている。</p>
<p>絵本「じしんのえほん、こんなときどうするの？」を読む。</p>	
<p>T: (だんごむしのポーズを教えているシーンで) みんなだんごむしのポーズ知っているよね」と声をかける。</p>	<p>C: 絵本を見て「だんごむしだ」「知ってるよ」と言う。</p>
<p>1 帰り道で地震があったら、どこが危ないのかな? (ブロック塀の上の) 植木鉢はどうなるかな?と問いかける。</p>	<p>C: 「危ない」「落ちてくるよ」と言う。 C: 「3、2、1で(ページを)開いてほしい」 C: 「3、2、1」と嬉しそうに声を出す。</p>
<p>T: 「地震だ」と言いながら、絵本を揺らす。</p>	<p>C: 「揺らすのやめてほしい」「見えない止めるね。」</p>
<p>T: 「(地震が来て) ランドセルで頭を守っているね。」</p>	<p>C: 「自転車がキキョーになっていて危ないよ。(自転車もぶつかろう)」「早い」 C: 「先生、(読むの) 早い」</p>
<p>2 家で地震にあったら、何が危ない? どうやって身を守ったらいいのかな?」</p>	<p>C: 「テレビ、本棚が危ないよ。」「電球が落ちるかも。」 C: 「ガラス割れている。」「赤い(電話)も落ちているよ。」</p>
<p>3 学校で地震があったら、どこが危ない? どうやって身を守ったらいいのかな?」</p>	<p>C: 「机、教卓の下に隠れる。」「窓ガラス、テレビが危ないよ。」</p>

<p>T: 「(地震が来て) みんなの言った通り、机の下に隠れているね。花瓶が割れていて危ないね。」</p>	<p>C: 「象さんの下(遊具の下)に隠れる!」</p>
<p>4 公園で地震があったら、どこに隠れる?」</p>	<p>T: 「本当だね。みんな象さんの下に隠れているね。」 C: 「お尻が見えているよ」「お母さんに守ってもらってる」「おじいさんおばあさんびっくりしてる」など、絵を見ながら話す。</p>
<p>5 スーパーで地震があったら、何が落ちてくると思う?どこに隠れるといいと思う?」</p>	<p>C: 「お店の物(棚から品物)が落ちてくる!」 C: 「カレーのルーが落ちているね。籠で頭を守っているね。」 C: 「ごちんつなりそう(頭に籠がぶつかって痛そう)」 C: 「赤い看板(店内の天井からつらつらさされて落ちる看板)も落ちそう)」</p>
<p>6 海で地震があったら、何が危険かわかるかな?」</p>	<p>T: 「そうだね。でも、隠れるところがないからね。頭を守るのが大事だよ。」</p>
<p>T: 「(海で地震が起きると、何が危険かわかるかな?」</p>	<p>C: 「波が来る!」 C: 「波が来て、車の中に入る」「死亡するんだっけ?」 C: 「波が来て、波がざぶざぶと、みんなのところまで来ることだったね。高いところまで走って逃げた方がいいね。」</p>
<p>(絵本を読み終わる)</p>	<p>T: ガラスや植木鉢が割れている絵を見せ、「逃げる時、裸足で歩いたらどうなるかな?」と尋ねる。絵の上で足跡のペープサートを動かして、歩いている様子を表す。</p>
<p>T: 痛いよね。怪我しちゃうよね。」「本当にガラスの上を歩いたらケガをするから、これから卵の殻の上を歩いてみよう」と提案する。</p>	<p>C: 「痛い」「血出て怪我するよ」 C: 「嫌だ」「汚い」「痛い」と卵の殻の上を</p>

<p>歩くことに抵抗を感じている。</p> <p>T:「殻の上にシーシー引いてあるから、大丈夫だよ」</p> <p>H:「先生はやるよ」「ちよっただけやってみようよ」など誘う声かけをする。</p> <p>T:「これからみんなにやってみようよ」3つあるよ。よく聞いてね」と声をかけする。</p> <p>T:「1、椅子を片付ける、2、靴を脱いでお昼寝の時みたいに並べよう、3、テラスを正面にして3列に並ぼう」と伝える。</p> <p>H:「みんな聞いてたかな。3つやることあったね。まずは？」と問いかける。</p> <p>H:「じゃあ椅子持っている人は片付けて、あの人は靴を脱いで並びましょう」と声をかけする。</p> <p style="text-align: center;">卵殻の上を歩く体験をする。</p>	<p>T:新聞紙を3列に敷いて、1列に3個ずつ卵殻のセットを置く。1列毎に、卵殻セットの準備を置いておく。</p> <p>H:卵殻のセットを見せて、「どんな音がすると思う？」と問いかけている。</p> <p>T:「卵殻の上を歩いてガラス踏んだらどんな感じか、やってみよう。まずは靴下で卵殻の上を歩いてから、靴を履いてもう一回歩いてみよう」と声をかけする。</p> <p>H:「もう（歩いて）いいんだよね」と確認する。</p> <p>T:「もういいよ。スタート」と手を叩く。</p> <p>T:4人に一個のベースで、卵殻のセットを新しい物に取り替える。</p> <p>T:「靴を履いてみるとどんな感じかを試してみよう」と声をかけする。</p> <p>T:靴の時は、卵殻セットの交換ベースが早く、2～3人に一個で新しいものに替える。</p>
--	--

<p>H:「まだ2回歩いていない子、いるかな？」と全員が終わったかを確認する。</p> <p>H:「靴下と靴で2回だよ」と声をかけする。</p> <p>T:「最後お話しして終わろうかな。その場で座りましょう」と声をかけする。</p>	<p style="text-align: center;">活動の振り返りをする。</p> <p>T:「今日は靴下と靴で2回、殻の上を歩いたけど、どうだったかな。靴下の時はどうだった？」と尋ねる。</p> <p>T:「靴の時は？（どうだった？）と尋ねる。」</p> <p>T:「靴下、痛かったよって言うお友達、手を挙げて。はーい」と問いかける。</p> <p>T:「じゃあ靴だったら、痛くなかったよって言うお友達は？」ともう一度問いかける。</p> <p>T:「保育所では、みんな靴を履いているよね。お家では靴を履いているかな」と問いかける。</p> <p>T:「お家で地震にあった時、裸足のまま逃げて大丈夫かな」と尋ね、子どもが安全に逃げる方法を考えられるようにする。</p> <p>T:「トイレのスリッパいいと思うよ」と子どもへの答えを受け止める。</p> <p>T:「今日は靴を履いたら安全なことが分かったね。どうしたら安全に逃げられるかを考えて、また避難訓練で逃げる練習をしようね」と伝え、子どもが危険を回避する力を身に付けられるようにする。</p>
--	--

<p>実践者、担任保育者の働きかけ・言葉かけ</p> <p>H:「今から五十嵐先生が楽しいこととするよ」と声をかけする。</p> <p>T:「だんごむしもするよ」と答える。</p> <p>T:「津波って何か覚えているかな」と尋ねる。</p> <p>T:「そうだね。波がみんなの所まで、来るといったね。今日は津波のお話だよ」と前置きする。</p>	<p>クラスの子どもたちの様子</p> <p>C:「3列に並んで座っている。」</p> <p>C:「えーまた、だんごむしのするんでしょ」と答える。</p> <p>C:「わかるよ」「波がざぶーんって(来る)」と自分の言葉で説明する。</p> <p>C:「はなちゃん、ちゃんと隠れているかな」と尋ねる。</p> <p>C:「でも、だんごむしで小さくなったら、隠れられるよ」と声をかける。</p> <p>C:「小さくなってるね。上手だね」と声をかける。</p> <p>C:「はなちゃん、早歩きでできてないね。遅いね」と声をかける。</p> <p>C:「犬と(一緒に)いる」「笑っている」と絵を見て話す。</p> <p>C:「インコおる」と動物に注目している。</p> <p>C:「津波が来て、避難しているね」と声をかける。</p> <p>C:「はなちゃん隠れるのできてるね」「早歩き、上手になってるね」と声をかける。</p> <p>C:「おじさんも逃げないかね」「避難するときに、赤ちゃんが乗る車のことだよ」と答える。</p> <p>C:「津波で家が流されて、はなちゃんが仮設住宅にいるシーン」</p>
<p>絵本「はなちゃんのはやあるき はやあるき」を読む。</p>	<p>1 避難訓練で、はなちゃんが机の下に隠れるが、お尻まで隠れていないシーン</p> <p>T:「はなちゃん、ちゃんと隠れているかな」と尋ねる。</p> <p>T:「でも、だんごむしで小さくなったら、隠れられるよ」と声をかける。</p> <p>T:「小さくなってるね。上手だね」と声をかける。</p> <p>2 避難訓練で、はなちゃんがゆっくり歩いているシーン</p> <p>T:「はなちゃん、早歩きでできてないね。遅いね」と声をかける。</p> <p>3 はなちゃんが早歩きの練習をしているシーン</p> <p>T:「はなちゃん、早歩き頑張っているね」と声をかける。</p> <p>4 地震と津波が来て、避難しているシーン</p> <p>T:「はなちゃん隠れるのできてるね」「早歩き、上手になってるね」と声をかける。</p> <p>T:「おじさんも逃げないかね」「避難するときに、赤ちゃんが乗る車のことだよ」と答える。</p> <p>5 津波で家が流されて、はなちゃんが仮設住宅にいるシーン</p>

<p>T:「波が来て、お家や保育所が流されちゃったんだって」と声をかける。</p> <p>T:「代わりのお家のことだよ」と答える。</p> <p>T:「インコのチロだよ。お家にいたから、死んじゃったんだって」と絵本のページを遡って見せながら伝える。</p> <p>T:「はなちゃん早歩きの練習、頑張っていたから逃げられたよね」と話す。</p> <p>T:「でも走ったら転んじゃうよね。早歩きできるように頑張ろう」と声をかける。</p>	<p>C:「仮設住宅って何？マッシュンみたいなな？」と疑問を持つ。</p> <p>C:「チロは？どうなっちゃったの？」とインコのチロを心配する。</p> <p>C:「チロって何？」とインコのチロを覚えていない子どももいる。</p> <p>C:「でも走ったらいいんじゃない？」と自分の意見を話す。</p> <p>挿れたらだんごむし体操をする。</p> <p>T:「ぼうさいダックの①だんごむし②チーター③たぬきのポーズの絵カードを見せ、「前みんなまでポーズしたよ」と声をかける。</p> <p>T:「今日は歌を歌いながらするよ。初めての歌だけでできるかな？」と声をかける。</p> <p>T:「みんな大きいお兄さんお姉さんだから大丈夫。できるよ」「最初は先生が歌うから聞いてみてね」と励ます。</p> <p>T:「歌詞カードを貼る。」</p> <p>H:「CDとオーディオの相性が悪く、音源が流れない。」</p> <p>T:「歌う順番は、緑(色の文字)の①地震、青(色の文字)の②津波、赤(色の文字)の③火事だよ」と声をかける。</p> <p>H:「歌詞読んでみようよ」と声をかける。</p> <p>T:「せーの」と声かけし、1～3番まで声に出して読む。</p> <p>C:「一緒に歌詞を声に出して読む。」</p> <p>C:「(歌詞カードは)大きいけど、そんなに長くないかも」と感想を持つ。</p> <p>H:「カード見せて。先生、だんごむしのポーズ見たことないから、見せてよ」と声かけする。</p>
---	--

T:「絵本で、はなちゃんやさんが早歩きを頑張っていたよね。みんなも避難訓練で逃げる練習しよう」と呼びかける。
 T:「危ないから、例えば好きなおもちゃも置いて逃げるんだよ。自分の身は自分で守ろうね」と呼びかける。
 C:「チロは？チロ持って逃げたら良かったのに」と感想を話す。
 C:「はい」と頷く。

T:①地震②津波③火事の絵カードを順番に見せ、「何のポーズかな」と尋ねる。
 T:「みんなよく覚えてるね。上手」と声をかける。
 H:パソコンでCDを流す。
 T:「ピンクの星（で囲ったサビの部分）をみんなで歌ってみよう」と声をかける。
 H:音響にCDをセットする。
 T:「歌えるところは一緒に歌おう」「ポーズを取るところを言うから、全員でポーズを取ってね」と声をかける。
 T:「1個だけお約束。チャーターのポーズの時は、腕だけ真似しようね」と声をかける。
 T:「他のクラスに音が聞こえて、お友達びっくりするからね」と声をかける。
 T:「C君みたいに腕だけ真似っこしよう」と呼びかける。
 H:歌「じしんだんだん」を流す。
 T:大きな声で歌い、ポーズを取る所で「だんごむし」「チャーター」「たぬき」と呼びかける。
 T:「たぬきのポーズできるように、ちよつと変えたんだ」と答える。
 活動の振り返りをする。
 T:「今日は絵本と歌だけだったけど、みんな楽しかった？楽しかった？」
 T:「何が楽しかったかな」と尋ねる。
 T:「苦しいよね」「でも、たぬきのポーズは避難訓練でも使えよ。練習していこうね」と声をかける。
 C:素早くポーズを取る。②津波のチャーターのポーズで、走り出す子どもがいる。
 C:「もっとやりたい」「台風の（ウサギのポーズ）したい」と言う。
 C:冒頭を口ずさむ子どもがおり、地震の歌に興味を持っている。
 C:「何人かの子どもが、サビを歌っている。」
 C:「なんで？」
 C:「C君が足踏みをせずに、腕だけ強く振っている。他の子どもも真似をする。」
 C:素早くポーズを取ることができている。
 C:最後のサビは、よく声が出ている。
 C:3題目は歌詞カードと歌で、歌詞が異なっているため、「なんで？」と言う。

